

ケニヤ、カクマ難民支援



古着ダンボール箱694箱とサッカーボール300個を寄贈!



今年も難民キャンプへの支援を皆様のご協力をいただき、進めることができましたことを感謝いたします。

6月の10日間、横浜の倉庫に全国から古着が宅急便で送られてきました。今年は20フィートコンテナ1台に入り切れず、40フィートコンテナに詰め込んで送りました。しかし、カクマキャンプの古着倉庫はすでに空っぽの状態で、4万人の難民に行き渡る衣服を集めるのは大変なことです。

難民キャンプではサッカーが大変盛んですが、ボールが無く子供たちは、ボロボロでくっついた手製のボールで遊んでいます。スポーツは孤児になった子供たちの大切な娯楽であり、精神的なりハビリテーションとしても大切な役割をはたしています。週末には広い、自然のサッカー場で、国別、グループ別の対抗試合が開かれますが、各チームに



本物のボールが1個あるかないかです。何とか、普通の練習でも本物のボールをとってしまいました。偶然のことからサッカーボールを作る会社の社長さんと知り合い、パキスタンの工場に直接発注し、破格の値段でボール300個を購入しプレゼントすることができました。

カクマ難民キャンプをたずねて

安居院 徹 東京2年2

約4週間にわたるカクマ難民キャンプ帯の中で、私は大きく分けて、幼稚園の建設労働、NGOの難民援助活動への参加、難民についての個人的な調査、という三つのことをした。

幼稚園の建設

日本で皆さんから頂いた寄付金は、LWFを通じて幼稚園建設に充ててもらったのだが、その建設に我々7人の「若者」はお手伝いとして加わった。36℃や37℃という大変な高温の中で、いわゆる「土方」労働に初めて挑戦した私達。「若者」と書いてはみたが、朝8時頃、意気込んで建設現場に出か

けるものの開始早々からバテており、昼食に宿舍へ帰る頃にはすっかり「ジジババ」に変身しているという具合。休み時間には労働者たちも色々とおしゃべりして仲良くなり、彼らの生の声を聞くこともできた。例えば「僕たちは丸一日働いて、たった60ksh(約100円)しか貰えない」という不平を聞いたり、「君の持っているサンダルを僕に譲ってください」と頼まれて困ってしまったり、「日本の自動車は素晴らしい。お前も自動車が作れるか」と真面目な顔で聞かれて戸惑ったり…。カクマを出発する8月26日、最後に建設現場へ彼等を訪ねたのだが、皆別

れを惜しんでくれた。その時、仲良くなったザイル難民のドン・ボスコは、仕事を続けながらこう言った。「君は分かってくれると思うんだけど…。難民生活がみんなに惨めで苦しいものか、考えてもみてくれ。僕には妻もいるし、子供もいるんだ。養わなければならないんだ。配給分だけの食べ物があるし、破れたシャツや壊れたサンダルは自分でいもい換えなきゃならない。何をすることも金が要る。それなのに仕事がない。幼稚園ができたら、この仕事も終わりで。一体この先、どうすればいいんだ。」

彼は、込み上げる気持ちを抑えられないといった様子で、セメントで汚れた軍手の先を見つめた。あまりにも重い心の叫び聞きながら、私は時々わずくだけで、何も言葉が出なかった。



朝前の学習会で2時間学習 右端、安居院さん。



幼稚園。4つの教室と1つの管理棟うち1棟はほぼ完成した



千島を市場で売るスーダンの子供たち



難民の記念撮影



左手の人が、サイモンさん。黒い服の人は、サイモンさんのもとで研修を受けた。書いた子供たちを見ながら、いいように、写真を撮っているのだから、黒い服の人は戸惑ったそうですが、そんな表情を、「だーすけ、君が帰らなければ、誰かのような現状を、伝えることができるのか、世界にー」と強く訴えてくれたそうです。

NGOの難民救援活動

カクマ難民キャンプにやってきて一週間後の8月8日から、私たちはそれぞれに興味、関心に従って、NGOの様々な援助活動に実際に参加することになった。

「老人と障害者」プログラムで特に印象深いのは、定期病院訪問に同行させてもらった時のことだ。中央病院には結核患者専用の病棟があり、普通病棟とは隔離されているのだが、私が初めて結核病棟を訪ねた時受けたショックは、今でも鮮明だ。

病棟のテントの前に、三人の子供が座っている。地べたに座り込み、何やら遊んでいるらしい。そして、ソーシャルワーカーのスタッフがぼつりと言う。「あの子たちだよ」

「あの子たちが、どうしたの」「結核患者だよ。脊髄性のやつで、おかげで下半身が痺っていることを言えないよ。いわゆるhemiplegia(半身不随)だ。」

「えっ?」「よく見てごらん。ほら、あの子足を引きずっているだろう。」ふと、その少年と目が合う。ガーンと頭を殴られたようだった。前に進もう

と、腕を使って這うように下半身を引かずっている。少年の足はあっても、それはただ二本の棒のように胴体につながっているだけ。私はまるで、それまでニセモノの世界で一喜一憂していたような、そんな倒錯感を覚えた。なぜ、彼はこんな不幸を、子供の頃から味わわなければならないのか。これが難民に限らず、アフリカが抱えている貧困の一つの生々しい姿なのか。

なかには望みを失い、悲嘆にくれる患者もいた。だが、ほっとさせられたのは、そのよう状況下でも決して諦めることなく、明るさを保っている人がいたことだ。「サイモン、サイモン」と患者は皆、スタッフの顔を見せるとその名前を呼び、わずかに笑顔を見せる。さっそく「サイモン」は患者に物理療法を施す。足の関節をほぐすと、ボキボキと大きな音が鳴る。「アチャー!」

と、患者の男性があげるときよな悲鳴に、周囲がクスクス笑う。心の中をいともいかに誰かの幸福の支えになろう。このぐらい、シンプルなのが、今、何らかの確きを持って私に力を与えている。

彼等の明るさの源は、ここにあった。患者に希望を与える「サイモン」。患者にとって彼は、光輝くヒーローでもあり、なくてはならない存在なのだ。私はここに、「援助する人と援助される人」ではなく、「人と人」の間にしか生まれない信頼関係を見た。

他にも色々なNGOの活動に参加したが、人道援助の現場を実際に見て、「人としての当然の権利を守るために、人として当然の協力をする」という当り前のことを頭でわかっても、繊細な計画と根気強い姿勢がなければ実践することは本当に難しい。と肌で感じた。

カクマ難民キャンプで知り合ったスーダンやエチオピアなどの難民たちや、ケニア人スタッフ、共にワークキャンプに参加した仲間たち、こうした人たちもいかに誰かの幸福の支えになろう。このぐらい、シンプルなのが、今、何らかの確きを持って私に力を与えている。